

# Sort of, kind of の副詞用法

## ——口語における近似的表現——

高橋みな子

### I はじめに

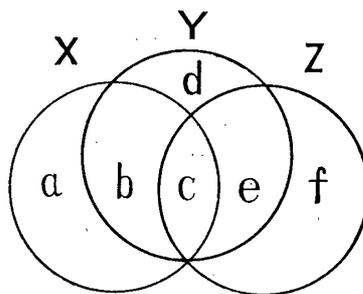
いわゆる School grammar に馴れきった目で、現代の口語英語を読む時、何でもない表現が実に生き生きと感じられることが多い。一般に日常生活の間に口と耳とを通じて発表され、理解される口語体は、話し手と聞き手の間に時間的余裕がないため、一見乱雑で無秩序に思われる。

このような口語の特徴が生じる理由について原沢正喜が「口語体と文語体」に述べていることを要約してみると次のようになる。(1)口語が状況即応的、場当りのものである。文語の Context が専ら「語」の関係(‘Word’ context)であるのに反し、口語ではその他に、さらに重要なものとして「場」の関係(‘Situation’ context)がある。(2)口語は必ずしも破格を意に介しない。例えば肯定を表わさない二重否定、語順転倒など。(3)口語文法の無形性(Amorphousness)。論理的な ‘S + P’ 型よりもはるかによく急迫した感情の表現に適する。(4)口語表現の暫走性(Temporariness)。例えば品詞の一時的転換使用。(5)口語特有の近似的表現(Approximation) 一見曖昧な表現であるが、実は事実にいっそう忠実な表現とも言うべきもの。例えば I think he is in trouble. Unhappy or something. —H.E. Bates における ~or something の形式。

Charles C. Fries は “Usage Levels And Dialect Distribution”<sup>2)</sup> の中で、辞書の中で語句の分類に用いられている “colloquial” という語について次のように述べている。

It is used to mark those words and constructions whose range of use is primarily that of the polite conversation of cultivated people, of their familiar letters and informal speeches, as distinct from those words and constructions which are common also in formal writing.

そしてわかりやすく図示している。



円Xは Formal literary English を表わす。

円Yは Colloquial English を表わす。

円Zは Illiterate English を表わす。

b c e は三つのタイプの英語が重複している部分。c はすべてのタイプの英語に共通である。

adf は XYZ のそれぞれ独特の領域である。

Easley S. Jones は Colloquial style は precision に欠けるが, ease, naturalness, simplicity, brevity, strength, concreteness, connotation という利点を持っていると述べ、やはり口語体の位置を図示し、さらに具体的な例を出している。<sup>3)</sup>

LITERARY	moderately, persons hasten, Had I been aware
NEUTRAL OR COMMON	rather, people hurry, If I had known
COLLOQUIAL	sort of, folks hustle, If I'd known
DIALECTAL	kinfolks
ILLITERATE	sorta, If I'd of knowed

上の図で、右上の長方形は book words を、左下は speech words を示し、中央部の重複する部分は事実上英語の99%以上を占めている。

「新英文法辞典」の Americanism の項を引くと、発音、綴字、語彙、文法にわたってアメリカ語法の特徴が記されているが、その文法の一般的特徴として、品詞間の比較的自由的な転換、複合語の優勢、表現の簡潔性、俗語における二重否定の頻用を挙げている。品詞別の説明に及んで、副詞のところでも最初に出て

くるのが I felt kind of lonely. である。

たまたま私が読んでいた Dorothy R. Parker (1893~) の短篇 “Here We Are” には、これまで述べてきたアメリカ口語の用例が豊富にあり、中でも sort of, kind of の副詞用法が頻々と出てくるのである。私は興味をひかれずにはいられなかった。そこで他にこの用法の実例を集め、あわせて辞書・文法書での取扱いを調べてみることにした。

## II Sort of, Kind of の副詞用法の例

### (1) Dorothy Parker : Here We Are

この短篇に出てくる23例をその順序で書くと、次のようである。

I sort of don't know where I am, or what it's all about.

But I just sort of got to thinking of them, all of them, all over everywhere, doing it all the time.

And it's ... well, it's sort of such a big thing to do, it makes you feel queer.

You have to sort of keep thinking.

A lot of people seemed to think she looked sort of tired.

Ah, I guess you're just feeling sort of nervous.

They say that girls get kind of nervous.

Things are all so sort of mixed up and everything, right now.

.....and then being sort of 'way off here,...

It's so sort of different.

It's sort of such a big thing.

It kind of presses.

It's kind of not like your other hats.

I was just telling you that because it was so kind of crazy.

I've been all sort of mixed up today.

And now I feel so sort of strange and everything.

I feel so sort of alone.

Then we can have dinner, and sort of see what we feel like doing.

I sort of didn't think people went to theaters.

We could go.....and maybe have a little dinner in the room, kind of quiet.

It all got so sort of funny, sort of like a nightmare.

It would be sort of such a bad start.

### (2) Ernest Hemingway : My Old Man

少年の父親に対する敬慕の気持を一人称形式で書いた短篇で、ここに出てくる8例をその順序で書くと次のようである。

My old man was sort of dried out and he couldn't keep down his kilos without all that running.

Sort of dancy and tight looking with the jock keeping a tight hold on them.

My old man sat there and sort of smiled at me.

It's sort of like a club.

Everybody was looking funny and saying “Kzar” in sort of a sick way.

He looked at me sort of funny.

He'd feel sort of doleful after the last race.

I couldn't stop crying, crying and choking, sort of.

以上二つの短篇において、特に sort of, kind of の副詞用法が目立っているが、他の作家のものにも、幼児向けの絵本にさえもその用例が見出される。

## III 辞書・文法書での取扱い

ここで一応 kind of, sort of の副詞用法について内外の辞書・文法書などで、どのように取扱われているか調べてみたい。

まず私の愛用する A. S. Hornby の Idiomatic and Syntactic English Dictionary (1942) では

Kind of (Colloq. or vulgar, used as an adverb) to some extent, as :

I kind of [kàindəv, kàində]

thought this would happen (i.e.

I half or vaguely expected it.)

sort of (colloq. use) see kind of.

更に同じ編者の The Advanced Learner's Dictionary of Current English (1963) では、大体前記の説明と同じであるが、kind of が時には kinda と綴られることがあるということと、sort of のところで、used vaguely by persons who cannot express themselves clearly. という説明を付け加えている。

H. W. Fowler の The Pocket Oxford Dictionary of Current English (1924) では、この用法について、次の例を出している。

I kind of expected it, colloq., vaguely

sort of vibrates, sort of moist, colloq.,

vibrates, moist, as it were or so to

speak.

The Oxford English Dictionary (1884~1928) では, kind 14.d. で

colloq. kind of (vulgarly kind o', kind a', kinder etc.) is used adverbially ;  
In a way, as it were, to some extent.  
The adverbial use arises out of the adjectival : cf.

She was a mother of a kind to me.  
She was a kind of mother to me.  
She kind o' mothered me.

kind of の副詞用法の起源にも触れていることに注目される。また sort の 8.c. で

(A) sort of, o', a, sorter used adverbially :  
In a way or manner ; to some extent or degree; somewhat; in some way, somehow.  
Chiefly dial. and colloq.

そして kind of, sort of のこの用法の例を豊富に挙げている。

The American College Dictionary では  
kind of (used adverbially) Colloq.  
after a fashion; to some extent; somewhat; rather : the room was kind of dark.

sort of については触れていない。

日本人の手になる辞書では, 初級用のものから大辞典にいたるまですべてこの用法を指適し, なまって kind of が kind o', kind a', kinder となることを注意しているものが多い。三省堂の College Crown English-Japanese Dictionary (1964) では kinda, kinder を kind とは別の見出語として扱っているほどである。

文法書では代表的なものとして, G. O. Curme は  
This kind of is often used in colloquial speech as an adverb with the force of 'to a certain extent': 'I kind of expect it.' Sort of has the same meaning: 'If I were you, I would hunt him up and sort of get in touch with him.'

と記し, O. Jespersen は

There is a tendency to treat kind of and sort of as inseparable units; cp. the vulgar kind of before a verb: "I kind of admire her."

とこれも比較的簡単に記している。<sup>6)</sup>

H. Poutsma は

A curious conversion of a noun into an adverb is the colloquial and vulgar uses of

sort of and kind of, often shortened into respectively sorter and kinder, to modify verbs or adjectives.

とまず書いてから, O. E. D. を引用してその起源を述べ, 更に次のようにつけ加えている。<sup>7)</sup>

The practice does not seem to have found currency until quite recent times, but is now common enough.

Poutsma は非常に多くの実例も載せている。

E. Kruisinga も, 次のような説明のあと, (a) (b) (c) に分類して実例を記している。<sup>8)</sup>

The nominal groups with kind of, sort of, have led to the use of these words as adjuncts to verbal forms (a)' and to adjectives (b). Occasionally sort of is quite separated from the word it refers to(c).

前述の Fowler は "kind of startled" というような表現は, 容易に避けられることであるが, "in <sup>9)</sup> hasty talk" のような場合には許せると言っている。

以上のような言及の他に, この用法に対して厳しい態度を示しているものもある。当然のことながら, 主に学生を対象とするテキストではそうらしい。例えば L. J. O' Rourke は次のように注意している。<sup>10)</sup>

Avoid the use of "kind of" and "sort of" as adverbs modifying adjectives or adverbs.

Use rather, somewhat, or a little instead,

Example 1. The patient has been somewhat restless all day.

Example 2. Mr. Hill spoke rather sharply to the clerk.

Expressions like "kind of restless" and "sort of sharply," while often heard in everyday conversation, should not be used in more formal speech or in writing.

テキストの中で必ずこのような注意が述べられているということは, 逆に言えば, 実際にはこの用法が非常に広く使われていることを示していると思う。私が接した例だけでも, 男女を問わず, また年令, 職業もさまざまな人物が用いている。よく辞書などではアメリカ口語と断っているが, イギリスの作品にも見られる。

Evans は, この用法が合衆国においてあらゆる言語層で用いられ, それを非難する人々, あるいはまた最も高い教育を受けた人々の話にも出て来ると言っている。<sup>12)</sup>

#### IV 初期の用例

Poutsma は前述の引用文の中で, この用法が広く

用いられるようになったのは最近のことだと述べているが、いつ頃から用いられているだろうか。意味から考えても、形から考えても、**a kind of, a sort of** のあと名詞が来るという普通の用法から発達し、その後冠詞も脱落したものと思われるが、O. E. D. その他の用例の推移から見ると、その発達は自然なものである。

O. E. D. の **kind of** の例では、1849年の例、Dickens の “David Copperfield” の中の文を初めとしてそれ以後の数例を挙げ、**sort of** のところでは、1790年の例を初めとして冠詞 “a” を伴っているものを3例、冠詞を伴わない例としては1833年を初めとして3例挙げている。

O. E. D. の Supplement (1933) には、“Earlier U. S. examples.” として、1806年の例を初めとして、1830年代40年代のものを数例載せている。愉快的な例として、“I rather kinder sorter guess so, than kinder sorter not so.” (1855) というごていねいなものまである。

いくつかの文法書の中にある例には、Thackeray, Dickens, Bennet, Jerome, Galsworthy, Stevenson, S. Lewis などの作家の文が見られる。

市河三喜「英文法研究」(1912)にも、細江逸記「英文法汎論」(1917)にも挙げられている例がStevenson の Treasure Island の中の文 “You’ll kind of want to get ashore.” であるので、この作品の中に出て来る用法について調べてみた。**a kind of, a sort of** の普通の用法例が、それぞれ13, 5であるのに対して、副詞用法はここに引用されている一文のみである。他の作品に当ててみる余裕がなかつたことは残念であるが、今日ほどしばしば用いられてはいなかったことだろう。

V 用例のまとめ

辞書・文法書を介してではなく、私が直接集めた用例をすべて書き出す必要はないと思うので、それらを分類・集計したのが次の表である。この数字には、前述の “Here We Are” と “My Old Man” の例を含む。

集めた用例は全部で92であるが、それらが何を修飾するかによって分類した。

(1) 形容詞 (句)

例：It was kind of dark.

(2) (形容詞+) 名詞

例：I’ve sort of second sight.

They’re kind of crazy pictures.

(3) 動詞

例：Can’t you kind of hear it, honey?

(4) 副詞

例：You’re still kind of up in the air.

(5) 節

例：I felt sort of as if I’d come out of a dream.

(6) 分離しているもの

例：My hump just melted away—sort of —.

(7) 表現されていないもの

作中人物が、適当な言葉が思いつかないために表現されていないものである。Context によって推定できるが、このグループに入れた

例：You are kind of ………

また作品の中で使用する人物を男女に分けてみた。「その他」に分類されているものは、会話外の文中で用いられているものと、動物が主人公の場合である。

数多い例だとは言えないので結論を出すことは避けたいが、辞書・文法書などの説明から想像されるよりはるかに豊かに、さまざまな場面で用いられている。形容詞または動詞を修飾するものが大部分を占めているが、副詞や節を修飾するものまでであることは注目される。

“Twentieth Century Plays British” の中では、Ireland の作家のものの中にこの用法がいくつか見出されることは、Americanism と Irishism の共通点が他にも指摘されているだけに興味深い。

使用者別にみると女では **kind of** より **sort of** を用いるものがずっと多い。“very” の代りに “so” が

	修飾するもの							作品中の使用人物			計
	形	形+名	動	副	節	分離	不明	男	女	その他	
kind of	22	4	6	1			1	27	7		34
kinda	2		1				1	4			4
kind o’			1					1			1
sort of	24	8	17	1	1	2		20	31	2	53
計	48	12	25	2	1	2	2	52	38	2	92

女性に好かれている傾向と発音の上で関連があるのかも知れない。なまつた形は5例(いずれも男性が用いている)しか見つけられなかった。やはり作品として活字になる以上、限られたものであるから、我々の目に触れることは少ないだろう。ただし **kind of** と綴

っても発音は、(kàində) となることがあるから実際はもっと耳にすることが多いであろう。

“Here We Are” にこの用例が目立って多いのは場面、登場人物が特殊なものであることを考えなければならぬだろう。結婚式を済ませて、やっと車中二人だけになった男女の会話が作品の殆んどを占めているだけに、この sort of, kind of が彼等の心理の微妙な動きを示すのにきわめて効果的である。

## VI おわりに

kind of, sort ofの副詞用法を見出すために、いろいろと口語体に接する機会を持ったが、この用法に限らず、原沢氏の言う「近似的表現」に分類されるものが目立った。

言葉は人間と人間を結ぶものである。社会が機械的に合理的になっていけばいくほど、人間と人間との間に交わされる言葉には、一見曖昧だが、実は感情の含みの多い表現が好まれるのではなからうか。生き生きとした場面で見られるこの用法は、単に別の単語で言い換えただけでは不十分だ。曖昧さ、誇張、遠慮、いたわり、恥かしさ、心配等々と時に応じて話し手の気持を実にさまざまに映し出しているようだ。言葉とは生きているものだということを痛感する。

口語表現の中には、我々日本人にとって production の心配は全くない、recognition で充分というのが少なくないが、現代英語の著しい口語化の傾向を考える時、少なくとも、「聞く」「読む」領域では、もっと colloquial なものに接していないと、微妙なニュアンスや状況を把握できないのではないかと思う。

## 註

1. 原沢正喜「文語体と口語体」現代英語教育講座第8巻『英語の諸相I』(1964) PP. 113—157
2. C.C. Fries, “Usage Levels and Dialect Distribution,” The American College Dictionary (1947), Prefaces pp. xxiv xxvi.
3. E.S. Jones, Practical English Composition (1941), pp. 116-117.
4. 大塚高信(編)『新英文法辞典』(1959) PP. 95-102.
5. G. O. Curme, Syntax (1931), p. 545.
6. O. Jespersen, Essentials of English Grammar (1933), p. 202.
7. H. Poutsma, A Grammar of Late Modern English (1926), pt. II, sect. II, p. 661.
8. E. Kruisinga, A Handbook of Present-day English (1932), pt. II, p. 399.
9. H. W. Fowler, A Dictionary of Modern English Usage (1926) p. 312.
10. J. M. Kierzek and W. Gibson, The Macmillan Handbook of English (4th ed. 1960), p. 453.
- L. M. Myers, Guide to American English (2nd ed. 1959), p. 150.
11. L. J. O'Rourke, Self-aids in English Usage (1943), p. 150.
12. B. Evans and C. Evans, A Dictionary of Contemporary American Usage (1957), pp. 263-264 and p. 466.
13. “Theer’s been kiender a blessing fell upon us.’ said Mr. Peggotty.  
なお Poutsma は前掲書でこの文を挙げ “Such a combination…… is very vulgar and appears to be very rare.” と言っている。
14. この用法に注目して私が読んだ作品のうち、一ヶ所でもこの用法を含む次の諸作品が集計のもとになった。

## Plays:

- 1) Lennox Robinson, The Far-off Hills (1928) (Twentieth Century Plays British)
- 2) Robert Sherwood, The Petrified Forest (1935) (Sixteen Famous American Plays)
- 3) Thornton Wilder, Our Town (1938) (Ibid.)
- 4) Arthur Miller, Death of a Salesman (1949) (Penguin Books)
- 5) Reginald Rose, Dino (The Best Short Plays of 1955-1956)
- 6) A. R. Gurney, Jr., Three People (Ibid.)
- 7) Marvin L. Seiger, Blue Concerto (Ibid.)
- 8) A. R. Gurney, Jr., Turn of the Century (The Best Short Plays of 1957-1958)
- 9) Tad Mosel, The Presence of the Enemy (Ibid.)

## Stories:

- 1) O. Henry, The Phonograph and the Graft (Cabbages and Kings, Collins Classics)
- 2) Ring Lardner, Harmony (Masters of the Modern Short Story)
- 3) Ernest Hemingway, My Old Man (Ibid.)
- 4) Dorothy Parker, Here We Are (Big Blonde & Other Stories)

5) Kathryn Jackson, Bedtime Stories  
(Golden Books) 幼児向けの絵本

Scenarios:

- 1) Love in the Afternoon 昼下りの情事(米)
- 2) The Eddy Duchin Story 愛情物語(米)
- 3) A Taste of Honey 蜜の味(英)
- 4) Love with the Proper Stranger  
マンハッタン物語(米)
- 5) Ballad in Blue 星空(英)
- 6) One Potato, Two Potato わかれ道(米)

付 記

Kind of, sort of の副詞用法に関して、原稿 締切後に私が入手した資料二つを付記したいと思う。

そのうちの一つは、市河三喜「英文法研究」(1912)の中で言及されている「英語青年」vol. 27, No.5である。既にこの中の安藤貫一「英語と米語」の中で、この用法がとりあげられている。実例は kind of の形容詞を修飾するものが5, 動詞を修飾するものが2, sort of のなまった形 sorter の動詞を修飾するものが3例集められている。それらを1例ずつ引用してみよう。

The room looks kind of empty without those pictures.

It kind of seemed to me that something better, could have been done.

You know, ever since my mother died, I've sorter looked upon you as a mother.

この筆者は、この用法が「既に米全土に普及して居る形勢である。」と述べている。

「英語青年」からの古い資料とは違って、他の一つは、昭和40年度「会誌」(愛知県高等学校英語教育研究会, 第5号)の中の竹中忠夫「高校英語教科書に現われた米語語法」である。これによれば、高校の教科書の中にすら kind of の副詞用法が見出される。見出されたのは2種の教科書からで、そのうちの一つは本文中の他に Some Useful Expressions で特にとりあげている。本文中の実例は次の通りである。

I'm kind of ashamed of myself for making so much fuss. (The Crown English Readers, Book II, P.44)

It is kind of singular. (My English Readers, Book III, P.13)

教科書の中に見出されたこれらの例に接し Bookish English に馴れた者にとって、改めて口語英語の進出ぶりを認識させられることである。